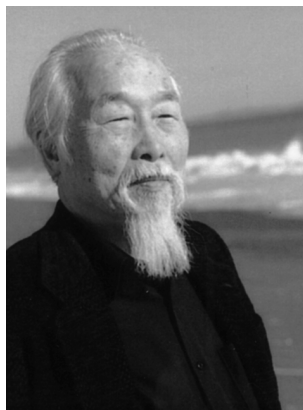


# 「釈迦内柩唄」に打たれる

高史明



高史明(コサミヨ)

一九三二年山口県に生まれる。

戦時下の日本に生まれた一朝鮮人の生い立ちを描いた「生きる」との意味(筑摩書房)は四十一刷の再版を重ねるベストセラーに。「少年の闇―歎異抄との出会い」(径書房)「ほんとうの幸せって何ですか―高史明親鸞論集」(宝蔵館)その他著書多数。

一九七五年日本児童文化協会賞。一九九三年第二十七回仏教伝道文化賞を各受賞。

希望舞台の「釈迦内柩唄」を観た。いや、ただ観たというだけでは足りない。深く打たれ、感動した。そして、自分の心底恥ずかしさを意識した。水上勉さんがこの戯曲を書いたのは、一九七五年頃だったという。それから今日までこの戯曲は、それこそ何百回となく公演されているに違いなかった。にもかかわらず、私はごく最近までこの素晴らしい舞台を知らなかったのである。

この戯曲は、テレビや映画になつていなかった。そして、私の情報源はもっぱらテレビや新聞など、いわゆるマスコミだったのである。しかし、人々の手弁当の熱意に支えられたこの希望舞台にこそ、今日の時代の闇をまっすぐに照射して真の希望への道が拓かれていたのである。

争の大義とされた「大量破壊兵器」問題がある。恐ろしい破壊と殺戮が、いままなお続いているイラクには、戦争の大義とされた「大量破壊兵器」はなかったのである。最近アメリカとイギリスの議会で行われた独立調査委員会が、この結果を発表している。虚報が戦争を現実化してしまうとは、なんと恐ろしいことであろう。

死者の数だけでも七五九八名の死者を出している。その非道に対して、民芸の柳宗悦ら一、二の識者を除くと、ほとんどの人が抗議の声を上げていないとは何ということであろう。しかも、今日なお日本の教科書では、この事件については「―これに対して朝鮮総督府や朝鮮軍は武力で弾圧したが―」と表現されているのである。その「朝鮮軍」とは、いったい何処の軍隊であろう。

しかし、虚報はいつの時代にあつても、人々の不幸に直結すると言っている。例えば、日本の不幸は、いつも朝鮮やアジアの侵略と重なっていたのである。「釈迦内柩唄」には、この不幸な時代の闇を深く見つめる眼差しがあると云っている。

その舞台は、戦中に朝鮮人や中国人に強制労働を強いていた花岡鉦山の近郊の釈迦内である。水上勉さんはその地に、万

人が必ず通過しなければならぬ火葬場を設定し、そこに生きぬく「隠し」の目を通してこの時代の闇を抉るのである。その時代の闇は、よくよく見つめるなら、まさに今日の時代の闇ではなからうか。

いや、過去の時代の不幸をまっすぐに見つめようとしないことが、そのまま今日の不幸に連なっていると云っている。

イラク戦争が告発している惨劇は、まさに過去の不幸が、いまなお人間の闇として続いていることを如実に示しているのである。

「釈迦内柩唄」に出現している人間ドラマは、過去の不幸を通して、今日の闇を抉りだしているのであり、それゆえにまた、そこに立ち上がる人間の香気は、私たちの未来の希望を明示していると言っている。私は、この舞台に、香る深い人間の薫りが、きつと万人の薫りになると違いないと思う。